

第6章 罪と罰

前章に見た物語でも「罪と罰」は含まれていたが、本章では、よりはっきりと、神の掟に背き、人の道に外れるような罪悪とそれに対する処罰に鳥が関わる物語を取り上げる。

1 プロメーテウス

鳥が関わる「罪と罰」の神話として真つ先に思い浮かぶのは、プロメーテウスの話であろう。その次第をアポロドーロスは次のように記している。

プロメーテウスは水と土から人間を形づくり、人間に火も与えた。ゼウスの目を盗んで大ウイキヨウに隠したのだ。ゼウスはそれに気づくと、ヘーパイストスに命じて、カウカソス山に彼の体を釘で打ちつけさせた。これはスキュティアの山であるが、その上に釘で止められたまま、プロメーテウスは何年ものあいだ拘禁された。来る日も来る日も一羽の鷲が飛んできて、彼の肝臓の葉ようを食

べたが、肝臓は夜のあいだにまた大きくなった。プロメーテウスは火を盗んだことでこのような罰を受けたが、ついにはそののちヘーラクレスが彼を解放した。〔ギリシア神話〕一・七・二)

アイスキュロスの『縛られたプロメーテウス』は、ヘーパイストスとその配下の「権力」および「暴力」がプロメーテウスをカウカソス山にはりつけにする場面で始まる。しかし、鷲が肝臓を啄む情景は舞台にのせるのが困難であったためか演じられず、ただ、ゼウスの使いとしてやってきたヘルメース神の科白の中で脅し文句として言及されるのみである。プロメーテウスは、ゼウスがどんな結婚をするに権力の座から転落することになるか、その秘密を知っていたので、それを聞き出すようにとゼウスはヘルメースを遣わした。しかし、プロメーテウスは答えることを頑なに拒んだことから、ヘルメースは言った。

まずは、切り立った崖を、雷電と雷火によって父神ゼウスは打ち砕き、そこへおまえの体を葬るだろう。岩がおまえをしつかり抱えて放さぬだろう。長い時の経過を満たしたのち、おまえは再びここへ戻って光を目にするだろうが、今度はゼウスの翼ある犬、血に飢えた鷲が飽くことを知らずにおまえの体をぼろぼろに引き裂くであろう。招かれずとも訪れて一日中食事を続け、おまえの肝臓は嚙まれて黒ずむが、なお啄まれるであろう。〔縛られたプロメーテウス〕一〇一六―一〇二五)

このような脅しにも反抗の意志を曲げなかったため、プロメーテウスは奈落へと落とされることとなり、その姿が消えるところで劇は終わる。

しかし、プロメーテウスが、握っている秘密を取り引き材料に使ったという伝承もあって、ヒュギー

ヌスには次のように伝えられている。

ネーレウスの娘テティスには予言があつた。彼女が産んだ息子は父親よりも強くなるであろうというもので、これはプロメーテウス以外には知る者がなかつたため、ユツピテル「ゼウス」が彼女と床を共にしようと欲したとき、プロメーテウスは、縄目を解いてくれるなら教えてやろうと約束し、誓約を交わしたうえでユツピテルにこう教えた。テティスとは床を共にしないように、さもないと、力の上回る者が生まれてユツピテルを王座から突き落とすことになり、ユツピテル自身がサートウルヌスに遭わせたのと同じ目に遭つてしまう、と。そこで、テティスはアイアコスの子ペーレウスに嫁ぐ一方、ヘーラクレスが遣わされてプロメーテウスの心臓を食べていた鷲を殺した。鷲が殺され、三十年ぶりにプロメーテウスはカウカソス山から解放された。(「神話伝説集」一〇四)

こうして、めでたくゼウスは天界にとどまることができ、ペーレウスに嫁いだテティスはアキツレウスを産むこととなったが、ルーキアーノスによると、プロメーテウスの申し出をゼウスはすぐに信用しなかつたらしい。天から火を盗み出したり、捧げ物として肉の代わりに脂肪に包んだ骨を差し出したような相手であるから、この用心は当然で、両者のあいだでこんな対話が交わされた。

ゼウス 私を言いくるめる気だな、プロメーテウスよ。

プロメーテウス そんなことをして何になります。そうしたところで、あなたはよくご存じですもの、どこにカウカソスがあるか。枷かせがなくて困ることもありませんでしょう、私の御縄を頂戴した場合には。

ゼウス まず先に言ってみよ。どんな代価を払うつもりだ。私にどうしても欠かせぬものなのか。

プロメーテウス あなたがいま歩を進めている行き先がどこか言い当てたら、信用してもらえますかね、そのほかに私が予言することについても。

ゼウス しないはずがなからう。

プロメーテウス テーティスのところへ。彼女とくつつくつもりですね。

ゼウス それはそのとおりでだが、それから先はどうなんだ。言ってみろ。おまえは本当のことを言いそうだからな。

〔神々の対話〕、「プロメーテウスとゼウス」

こうして信用されたプロメーテウスはゼウスに秘密を教え、その見返りに、ゼウスはヘーパイストスを遣わしてプロメーテウスを解放させる約束をしたところで、この短い対話は終わっている。ヒュギーヌスでは、ヘーラクレスがプロメーテウスを解放し、その際に鷲を殺した、と語られていたが、これはヘーラクレスという剛毅な英雄にふさわしいものの、考えてみれば無駄な殺生と言わなければならぬ。解放するには、それよりも、プロメーテウスの縄目を解くことが第一であるから、ルーキアーノスにおいて鍛冶の神ヘーパイストスが送られたのは理屈に合っている。ただ、理屈に合いすぎるとは滑稽な調子を醸し出すこともあり、これはその場合かもしれない。

2 テーレウス、プロクネー、ピロメーラー

テーレウスとその妻プロクネー、そしてプロクネーの妹ピロメーラーの物語は、古代ではおそらく、プロメーテウスの物語に劣らずよく知られていた。その標準的な話形の大略は、アポッロドーロスが記

すとおりである。

パンディーオーンは母親の姉妹であるゼウクシッペーと結婚し、プロクネーとピロメラーといふ娘とエレクテウスとブーテースといふ息子をもうけた。ラブダコスに対して領地の境界をめぐり戦争が勃発したとき、彼は援軍としてトラキアからアレウス神の子テーレウスを招き、彼の助けで戦争を乗り切ると、テーレウスに自分の娘プロクネーを嫁がせた。テーレウスは妻とのあいだにイテュスといふ息子をもうけたが、ピロメラーに恋して彼女からも純潔を奪った。彼女にはプロクネーが死んだと偽り、その土地に隠したまま、ピロメラーと結婚して臥所を共にすると、彼女の舌を切り落とした。彼女は外套に文字を織り込み、それによってプロクネーに自分の災いを知らせた。プロクネーは妹をさがし出すと息子のイテュスを殺し、料理してから、それとは知らぬテーレウスへの食膳にのせる。そして、すぐに妹と一緒に逃げたが、テーレウスは気がつくや斧をつかんで追いかけた。姉妹はポキスのダウリアーで追いつかれると、神々に向かって、鳥に変えてくれるようにと祈った。すると、プロクネーはアエードーン「サヨナキドリ」に、ピロメラーはケリドーン「ツバメ」になった。テーレウスも鳥に変えられ、エポプス「ヤツガシラ」になった。

〔ギリシア神話〕三・一四・八

よく知られた物語には必ずと言ってよいほど異なる話形の伝承がある。アントーニース・リーベラーリスによって伝えられる次の話は、物語の舞台や細部にかなり相違があるものの、大筋はテーレウス、プロクネー、ピロメラーの伝承を踏まえるものと考えられる。

パンダレオースは、エペソスの一地域、いまは町のそばの岬のあるあたりに住んでいたが、彼にデーメーテルが贈り物を授け、食物をいくらたくさん詰め込んでもお腹が決していっぱいにならないようにした。さて、パンダレオースにはアエードーンという娘があつて、彼女は大工のポリユテクノスに嫁いでいた。この男の住まいはリユディアのコロポーンで、夫婦は長いあいだ共に暮らすことを互いに喜びとし、二人にはイテユスという一人息子が生まれた。

しかし、彼らが神々を崇めていたあいだは幸せであつたが、自分たちはヘーラーとゼウスよりも愛し合つていると、言わずもがなの言葉を吐いてしまったとき、ヘーラーもその言葉を聞き咎めて彼らに諷^{いさか}いの女神エリスを遣わした。エリスは彼らに仕事への競争心を吹き込んだ。ポリユテクノスは戦車の底板の仕上げに、アエードーンは織物の完成にあとわずかというところであつたが、取り決めを結んで、より早く仕事をすませた者は相手から女中を受け取るということにした。アエードーンのほうが早く織物を仕上げた——というのは、ヘーラーが彼女に手助けしたので——とき、ポリユテクノスはアエードーンの勝利に怒つて、パンダレオースのもとへ行き、自分をよこしたのはアエードーンで、彼女のもとへ妹のケリドーンを連れて戻るために来たのだと装つた。パンダレオースは何一つ邪^{よしま}なことを疑わずに連れて行かせた。ポリユテクノスは娘を手に入れると、彼女を藪の中で凌辱したあと、違^{ちが}う服を着せ、頭髮を刈り取り、もしこのことをアエードーンに話すようなことをすれば殺すぞ、と脅した。

彼は家に着くと、取り決めに従い、アエードーンに妹を女中として引き渡した。彼女が妹をくたくたになるまでこき使つたところ、ケリドーンは水瓶を持つて泉のほとりへ行き、しきりに嘆いた。その言葉をアエードーンが聞きつけ、二人はお互いに認め合い、抱き合つてから、ポリユテクノス

に災いを企んだ。二人で息子の体を切り刻んで肉を鍋に入れて調理したあと、アエードーンは隣人に指示を託して、ポリテクノスに肉を食べるように言ってもらうようにしてから、妹と一緒に父パンダレオースのもとへ行き、どんな災いを蒙ったかを話した。他方、ポリテクノスは息子の肉を食べてしまったことを知ると、姉妹を追いかけて、父親のもとまでやってきたが、パンダレオースの従者たちに捕まった。彼らはパンダレオースの家に非道なことを働いた者を逃げられないように捕縛したうえ、体に蜜を塗りつけて羊小屋に投げ込んだ。

すると、ポリテクノスはまとわりつく蠅に苦しめられたが、アエードーンが哀れに思い、以前のようにポリテクノスから蠅を追い払った。その姿を見た両親と兄弟は憎しみを覚えて彼女を殺そうとした。しかし、さらに大きな不幸がパンダレオースの家に降りかかる前に、ゼウスが憐れみを覚えて全員を鳥に変えた。その中には、海へ向かって飛び立ったものもあり、天へ向かったものもあった。パンダレオースは海鷲に、アエードーンはカワセミになり、すぐさま海中へ身を投じようと欲したが、ゼウスがそれを阻んだ。これらの鳥は航海中の人々が目にすれば吉兆である。他方、ポリテクノスは姿を変えてペレカース「キツツキ」になった。ヘーパイストスが彼の大工仕事のためにペレキユス「斧」を与えたからである。そして、この鳥は大工が目によれば佳い兆しである。また、アエードーンの兄弟はヤツガシラとなったが、これは航海中でも陸地でも目によれば吉兆である。海鷲か、あるいはカワセミと一緒に佳い。アエードーン「サヨナキドリ」は川や藪へ行ってイテユスのことを嘆いている。ケリドーン「ツバメ」はアルテミスの神慮により人里に巢を営むこととなった。無理やり純潔を奪われたとき、アルテミスの助けを求めて何度も叫びを上げたからである。

アポッドローロスとの共通点として、夫が妻の妹に乱暴、姉が妹を救出、息子が殺されて夫の食膳に出される、姉妹が逃げて夫が追いかける、三人とも鳥に、とくに姉妹はサヨナキドリとツバメに変身といったことが認められ、根幹は同じ物語と考えられる。しかし、アテーナイやトラキアの王家から庶民のレベルに舞台が移され、主要な登場人物の名前も変わっているうえに、夫婦の不敬、神罰、夫婦の競技、妹の変装、夫への処罰、妻の同情、神の憐れみ、両親および兄弟の鳥への変身といったモチーフが加えられている一方、妹の舌切りという重要なモチーフが欠落している。結果は、変装しているとはいへ姉が妹を見分けられず、「舌切り」がないのに妹が姉に真実を話さない、また、子供を殺す残酷な母である一方で、処罰を受ける夫に同情を示す妻、さらに、夫婦の冒瀆に対する神罰で始まった物語が神の憐れみで終わる結末など、無理と思えるところが目立つ物語展開となっている。その一方、この物語で妙に理屈に合っているのは、主要な登場人物の名前である。まず、最初から姉妹に鳥の名前がつけられている。また、テーレウスの代わりに登場するポリュテクノスの名前も「技術に富む」という意味で大工という職業を示すとともに、道具である「斧」という意味のペレキユスによって「キツツキ」ペレカースへの変身を導き出している。その点で、アポッドローロスでは、テーレウスが姉妹を追いかけるときに「斧をつかんで」と語られる理由ないし物語の必然性が認められないが、こちらでは「斧」に意味が見て取れる。いずれにしても、ここでは物語の舞台、登場人物の造形、出来事など、どこを見ても全体にスケールが小さい感じを受けるが、テーレウスの物語を細部にわたって物語るオウイデウス（変身物語 六・四二四―六七四）にあつては、とりわけ、登場人物の凶悪さが際立っている。

オウイデウスによれば、テーレウスとプロクネーの結婚には、最初から不吉の影が差していた。

ユーノー女神が介添えをせず、婚礼の神ヒュメナイオスも優美の女神も新婚の床に立ち合わなかった。復讐女神らが葬儀から取つてきた松明たきまろを捧げ持ち、復讐女神らが床を敷いた。軒には不吉なミミズクが止まり、奥の間の屋根の上に座った。この鳥の兆しのもとにプロクネーとテーレウスは結ばれ、この鳥の兆しのもとに親となった。

〔変身物語〕六・四二八―四三四

それから五年目のこと、プロクネーは妹のプロメラーに会いたくなくなり、テーレウスにアテーナイへ行き、一緒に連れてきてくれるように頼む。アテーナイで、テーレウスはプロメラーを見るなり、ニンフのような彼女の美しさのために恋の炎に捕らわれる。熱くなりやすいトラキア人の中でもとりわけ肉欲の強いテーレウスは、どんな犠牲を払ってでも彼女を手に入れたと思う。

彼はすでに待ちきれないという思いから、逸る口調で繰り返しプロクネーのことづけを述べ、彼女にことよせて自分の願望を語る。恋が導く雄弁により何度も重ねる頼みが度を越すことがあっても、これはプロクネーの望みだと話した。涙も交えたが、まるでそれもことづけられていたかのようだった。神々よ、人間の心はどれほど大きな闇夜で覆われているのか。不義を働こうとしているのにテーレウスは道義をわきまえる人と思われ、罪によって誉れを得ている。

(同六・四六七―四七四)

すると、プロメラーもまた姉に会いたいと思い、父親に抱きついて頼んだ。横にいるテーレウスは

口づけや首に巻かれた腕を目にすると、そのすべてが狂気を刺激し、燃え上がらせ、肥らせる。彼女が父親を抱擁するたびに、自分が父親であればよいのにと思ったことだろう。父親になったと

しても、非道な性格は変わらぬままであつたらうから。

(同六・四七九—四八二)

この懇願を父パンディーオンは聞き入れ、ピロメラーには翌朝出発することが許された。別れ際、テールウスは父親から、娘を守つてできるだけ送り返して欲しいという涙ながらの言葉を聞いたが、それにもかかわらず、沖に出るや勝利を確信し、ことの達成をやつとこのことで我慢しながら故国へ戻る。上陸すると、テールウスはピロメラーを家畜小屋に閉じ込め、力づくで征服した。ことが終わったあと、ピロメラーは「まるで、雌鳩が自分の血で羽毛を濡らしながら、いままで捕まれていた強欲な爪におまだ恐れおののいているかのよう」(同六・五二九—五三〇)であつたが、すぐに気を取り直すと、激しくテールウスを罵り、難詰した。

ああ、忌まわしい所行をなす野蠻人、残忍な男め。おまえの心は、父のことづけにも娘を思う涙にも動かされなかつた。姉の心遣いも私の純潔も結婚の契りも気にかけて、すべてをひっくり返した。私は姉の恋敵、おまえは二人の妻を持つ身となつた。「中略」いっそ、不実な男よ、悪事のし残しがないう、この命を奪えばよいに。「中略」だが、いつか報いを受けるときは来る。私自身も恥を捨てておまえの所行を話してやる。

(同六・五三三—五四〇、五四四—五四五)

このような言葉を聞いて、怒りとともに恐れを抱いたテールウスは、剣を抜く。

ピロメラーは覚悟して喉を差し出した。剣を見て、これで死ぬると心に望みが生まれた。だが、テールウスは、憤激して父の名をずっと呼び続けながら、なお話そうとものがく舌を鉄でつまみ、無情な剣で切り落とした。舌の付け根はびくびく動いているが、舌そのものは落ちて、黒い地面で

震えながらなにやら呟いていた。「中略」このような悪事のあとにも、とても信じがたいことではあるが、言い伝えによれば、傷ついた体を繰り返して己れの欲望の標的にしたという。

(同六・五五三―五五八、五六一―五六二)

こののちテーレウスはプロクネーのもとへ戻り、涙ながらにピロメーラーは死んだと嘘をつく、プロクネーはそれを信じ、妹の遺骸のないまま墓を建てた。それから一年、ピロメーラーは監視下の小屋に閉じ込められ、口も利けぬまま過ごしたが、ついに、白地に緋色の文字で罪業を織り込み、その織物をプロクネーに届けさせた。それを見るとプロクネーは全身全霊で報復の方策を思案した。まず、バツコス神に捧げる夜の祭儀に乗じてピロメーラーを救出、家に帰って姉妹は対面することとなったが、姉が抱擁しようとするのに、妹は目を上げられない。

自分が姉の恋敵だと思われ、地面に眼差しを落としたまま、誓言をすべく、神々を証人として、あの恥辱は力づくで受けたものだ、と声の代わりに手で訴えた。燃え立つ怒りを自分でも抑えきれないプロクネーは、泣いている妹を叱りつけて言った。「いま必要なのは涙じゃない。剣よ。でも、もしあるなら剣にもまさるものが必要よ。私にはどんな非道もなす覚悟ができています。王宮を松明の火で焼くというなら、下手人のテーレウスを炎の真ん中へ投げ込んでやるし、さもなければ、舌でも目でも、おまえの純潔を奪った部位でも、剣で切り取ってやる。でなければ、千の傷口から罪に穢れた魂を追い出してやる。どんな大それたこともなす覚悟ができています。それを何にするかまだ決めかねているけれど」。

(同六・六〇六―六一九)

このようにプロクネーが話しているところへ息子のイテュスが現れた。その子が父親似だと思ふと同時に企みが浮かんだが、近寄つてきた子を抱き寄せると決意が挫けた。しかし、妹と子供を見比べ、

私をこちらは「母さん」と呼べるのに、なぜあちらは「姉さん」と呼べないのか。パンデイーオンの娘よ、よく見なさい、自分がどういう夫に嫁いだのか。心得違いよ。道義を通すことも罪になるのよ、テーレウスのような夫が相手では。

(同六・六三三—六三五)

と言うと、プロクネーは泣き叫ぶ息子のみぞおちを剣で突いた。

彼女は顔を背けもしなかった。子供を殺すには一撃でも十分だったが、ピロメーラーが剣で喉を切り開いた。まだ生きていて、幾分か息のある体を二人は切り刻む。その一部は青銅の鍋の上で跳ね、一部は音高く串刺しにされ、奥の間は血膿が滴った。

(同六・六四二—六四六)

こうして料理した息子の体をテーレウスだけがあずかれる神聖な食膳として供したところ、テーレウスはそれとは知らず口をつけてから、イテュスと呼ぶように言う。

プロクネーは残酷な喜びを隠しておくことができず、いまにも自身の破滅を知らせようと逸り、「中におりますわ、お呼びの子は」と言った。彼は見回してから、どこだ、と尋ね、尋ねながら、もう一度呼んでみる。そこへ、狂おしい殺害の返り血で髪を濡らしたままの姿でピロメーラーが飛び出し、イテュスの血まみれの頭を父親の顔めがけて投げつけつつ、ああ、どんなによかつただろう、いまこのとき口が利けて、喜びをそれに見合う言葉で言い表せたら、と思つた。トラキーアの

王は怒号とともに食卓を押しのけると、ステュタスの谷から蛇髪の姉妹を呼び出す。かなうものなら、胸を切り開き、そこから忌まわしい料理を、飲み込んだ肉を取り出したいと望むかと思えば、今度は泣きながら、自分は哀れな息子の墓場だ、と言ひ、そして、いまや剣を抜き放つてパンティーオーンの娘らを追いかける。と、アテーナイ生まれの娘らの体が翼で宙に浮いていると思われた。いや、本当に翼で宙に浮いていた。二人のうち一方は森を指した。もう一方は屋根の下へ入ったが、まだ胸のあたりから殺害の痕跡が落ちずに、羽毛に血の印がついていた。テールウスは悲憤と報復したい一心で急ぐうちに鳥に姿を変えた。その頭頂には冠毛が立ち、長い剣の代わりに嘴が異様なほどに突き出ている。鳥の名はエポプス「ヤツガシラ」といい、顔は武装しているように見える。

(同六・六五三―六七四)